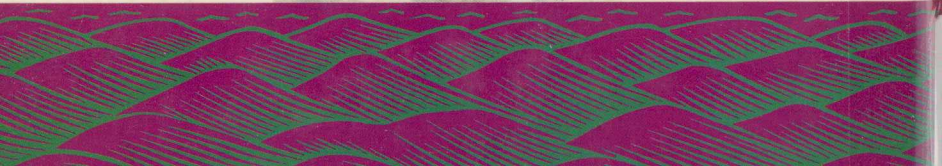
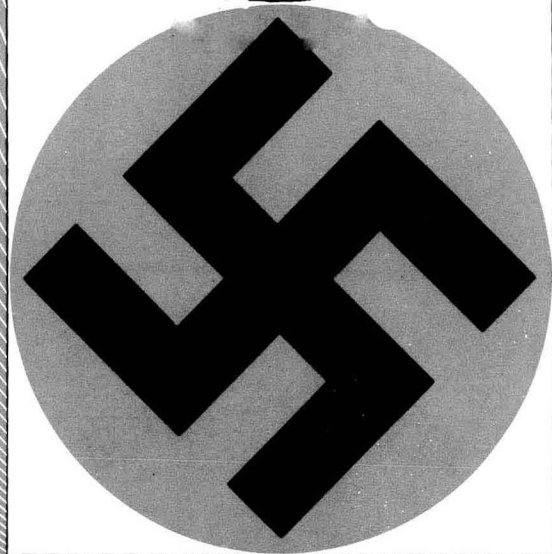


# KG200

J・D・ギルマン ジョン・クライヴ 井上一夫・訳





J・D・ギルマン ジョン・ウライヴ 井上一夫 訳

集英社

KG 200

by J. D. Gilman and John Clive

Copyright © J. D. Gilman and John Clive

Japanese translation rights arranged

through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

KG 200

一九七八年九月二五月初版  
一九七八年一月三〇日二版

著者 J・D・ギルマン／ジョン・クライヴ

訳者 井上一夫

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三ー六一五  
電話(〇三)二三九一三八一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一ー一〇  
電話(〇三)二三三〇一六三六一

販売部(〇三)二三八一七八一

印刷所 大日本印刷株式会社



©1978 Shueisha

0397-776022-3041

落丁・乱丁本はお取り替えいたします  
定価は帯に表示されています

この本に登場する人物は創作であり、実在の  
いかなる人物との類似も、その人物の生死に  
かわらず純粹な偶然の一致である。

A D・ブックデザイン・田名網敬一

K  
G  
2  
0  
0



KG200——ドイツ第二〇〇航空戦隊は実在していた。それは第二次世界大戦の秘密戦闘部隊であり、個々の小単位の隊ですら隊員どうしもたがいに知らされていないくらい秘密にされ、今日にいたっても、それに関する日記類や文書は連合軍とドイツ軍双方に、「紛失」とか「破棄された」といわれているくらい謎の多いものだった。それにしても、この部隊は連合軍に戦時中最大の危険な脅威のひとつを与えたし、その複雑な蜘蛛の巣のような作戦を解明することは何よりも急務とされていたのだった。

この本は創作ではあるが、十四カ国での各種調査と、未発表の情報に基づいたものである。KG200の公式記録は消えているにもかかわらず、各種文書、命令、戦時捕虜尋問記録、さらに情報機関の記録など、この物語を裏づけるものが発見されている。KG200の元隊員をたどることはできなかったが、個々の隊員の目に映ったことよって事実を明るみに出すことは、隊員相互がたがいに同僚の行動を知らされないよう周到な手を打たれていたので、できない場合もあり、本人がその意志のない場合もあって、いつも限度があった。それに、ほとんどの隊員がこれだけの年月のあと、話しながらなかった……これは彼らの指揮官のひとりであり、ドイツ空軍でいちばん勲章もたくさん得た最大の爆

撃機操縦士ヴェルナー・パウムバッハ中尉ですら、戦後発表されたその伝記にKG 200のことはひと言もふれていないという事実から見ても、驚くには当たらないことだ。

この沈黙のすべては、ひとつにはKG 200の活躍が、戦時国際慣習法の陸上戦闘法規二十三条にふれるという事実によるのかもしれない。たとえばそこには――

特別条約に規定された禁止条項に加えて、とくに休戦の白旗、国旗、軍の標識、敵の軍服を、ジュネーヴ条約の明らかなバツジと同様に適当でない用い方をなすことは禁じられている。

それにしても、コロラドの合衆国空軍大学の戦史部でさえ、最初の調査問合わせにこう答えている。「残念ながらドイツ第二〇〇航空戦隊やその隊員に関する一切の知識は当方では用いられていないことをお知らせします。もし彼らがB 17とB 24を飛ばしていたのなら、その使命は高度の秘密とされていたと思われまし、したがってその戦史は情報機関を経て入手されたものでしょうし、まだ秘密扱いは解除されていないのかもしれない」

しかし、関係者のそれほどの多くが沈黙を守っているにもかかわらず、資料は消え、秘密はまだ守られているにもかかわらず、ほとんど信じられないようなこの話が、やがて形をととのえてきて、この本の事実としての土台になったのである。

ここに描かれた世にも現実離れた、およそ信じられないようなできごとの多くが、実際にあったことなのだ。

大きなB 17は空で死にかけ、光る海に向って最後の千五百フィートを沈んでいくところだった。せまってくる海岸線の砂地のもやが破れた機首天蓋の強化ガラスにあいた星のような穴、蜘蛛の巣のようなひび、ぎざぎざの穴と入り組んだようにとけあっていた。

四基のエンジンの内側の二基が沈黙してしまっていた。右の外側エンジンは全開で唸りをあげ、爆撃機の浮力をささえようとしている。左舷外側のエンジンは咳こんでいた。苦悶するように小さく、パツと力を出しながら悲鳴を上げ、また咳こむ。操縦席の廢墟のなかに坐ったところから、操縦士はときどき危険をおかして、割れたハブから早い断続的な流れとなって翼の合衆国空軍の青と白の星の上流れ出すオイルに目を走らせるのだった。

ちらっとひと目見るだけで精いっぱいだった。破れた機首カバーから吹きこむ時速百八十マイルの強風のなかで、固くなってうずくまり、全力で操縦桿を前に押して、B 17が最後の死の失速で卒立ちのような形になってしまわないように、機首を低くおさえようとしているのだった。風の唸りをうわまわって、爆撃機がゆっくりと分解していくバリバキシギシイ音が彼にもかすかに聞こえた。

ヴァンゲローグ島上の一斉射撃でこのB 17に当たった八八ミリ弾の二発は、その場で機を破壊はしなかったが、おかげで文字どおり飛行不能になってしまったのだった。着陸のために機の角度をそれによって変えるべき昇降舵が、とびだしてもつれた針金にぶら下って役に立たない。爆弾投下態勢の位置に引っかけかかったままなので、B 17をどうしようもないくらい後尾が重い感じにさせてしまうのだった。水圧による操作は全然効かなかったし、機内通話装置もだめだった。上部機銃座の銃手の腰から下の脚まではそのころがっていたが、頭と胸は北海のどこか六十マイル沖にあるのだった。

さらにそのズタズタの肉塊のうしろには、胴部の床に風の吹きこむ口があった。最初の八八ミリ砲弾の衝撃で破られた、長さが大体八フィートで幅四フィートの穴だ。胴部の壁はすぐに起った激しい火災で黒ずんでいたが、いまはもう焰はない。一秒か二秒後に破裂した二発目が、右翼

のつけ根前方のすぐ外だったので、そういうことにしてくれたのだ。そいつは右の内側エンジンをその台座から半分押し上げてしまい、機首カバーの右側を破り、胴部には焰など生きのびられないくらい突風を吹きぬげさせたのだ。

しかしB17の後尾はまだ火を吐いていた。内側に引き上げてある後尾車輪が、後尾機銃座と胴部の間で空気の道をさえぎり、そのうしろには突風も吹かなかつた。後尾機銃手はその席で、もはや人間ではない無格好にうずくまった燃える肉体となって、二連のブローニング50機銃にのしかかるようにして、この二十分間、その狭い棺の熔けるものはすべて熔けてしまった焰のなかにとじこめられていたのだ。この死の席の頭上には、舵が片側に垂れ下っていた。このB17はもう舵をとることも、向きを変えることもできないのだ。

爆弾投下口は開いている。爆撃手はいまだは影も形もなく、そういえばこわれた機首には航行士もいなかったが——爆撃手が投下ボタンなど押しただけではない。最初の砲弾の爆風がその仕事をやってくれてしまったのだ。点々と穴だらけにはなつたが、爆風の気まぐれでこわされずにすんだその爆弾投下口の上に、横ざまに、蓋の開いたベニヤ板の箱が、もつれあつた索と開いた絹のパラシュートに引っかかっていた。箱のなかにはさらに二個の死体。

ひとつは紺の民間人の背広を着た若そうな男。その顔の下半分は吹きとばされていた。もうひとつはグレイのコートにブラウスとスカート姿の中年の女の死体だった。そっちは負傷の場所は見えなかった。仰向けに半分箱から出るように、素脚が爆弾投下口からぶら下っていて、眼鏡をかけた死んだその目が、ひびのいったレンズごしに上を見上げていた。

B17のなかでもうひとりだけ生きている男は、あいている爆弾投下口のわきにうずくまり、死んだこのふたりと、その下の白い波が点々として海を見下ろしていた。彼は向きなおって、胴体の激しい風にさからって無理に操縦室にもどつた。苦勞しながら操縦士のうしろの副操縦士席に割りこむようにはいる。操縦士はちらつと尋ねるように彼のほうに目を向けた。彼は首をふつた。操縦士は力をこめて操縦桿のほうにうなずいて見せ、副操縦士は前にはい出して膝をつく、それを前倒しにするのに力を貸した……それも苦勞しながらだった。その左手の三本目と四本目の指が切れた血まみれの短い切り株のようなものにすぎなかった。

操縦士はすばやく操縦桿から片手を離すと、座席の脇をさぐり鞆にはいったナイフを引き出した。風の唸りと破れた機首から聞こえる左エンジンのしゃがれた轟音で声は聞こえなかったが、彼はナイフで切るような手まねをした。

副操縦士は両手を前に出し、もう一度操縦士の顔を見る。操縦士は激しく首を横にふって、ナイフの刃を出した。力なく副操縦士はいいほうの手でナイフを受け取ると、操縦桿の下からそろそろとぬけ出し、また通路を爆弾投下室のほうにもどって行った。あいてしまった投下口から吹きこむ風にさからいながら、彼はベニヤ板の箱をささえているパラシュートの紐を切った。やっと最後の紐が切れると、彼は胴部の隔壁に体をもたせかけて、足で箱を押し上げる。ベニヤの箱と男の死体はきれいに落ちて行き、いまでは七百フィート足らず下にせまった荒れている海のなかに消えた。女の死体はちょっと引っかかって、爆弾投下口の扉の縁に片足でぶら下っていた。風がそのスカートを吹きとばしていた。一瞬、そいつはピンクの下着姿でいやらしく逆さまになってゆれていたが、それも副操縦士が恐ろしい頑張りで黒焦げになった隔壁に体を弓なりにしてもたれながら、引っかかった足を自分の飛行靴で押し落すまでだった。女の靴がぬげ、あっといふ間に女は落ちていった。傷ついた手からまたひどく血が出てきた副操縦士は、力つきそうになっていたが、またしても通路をはうように操縦室にもどった。操縦士が彼を見ると、彼はうなずいた。一分後には高度三百フィートでB17は海岸線をこえた。操縦士は機を空中に保てるのはあと九十秒だと思った。

機はますます早く沈んで行き、宵明りにひっそりしてい

るグレイの町を越えて角度を深めていく。軍用トラックが一台、脇に止まっている十字路があった。その向うには砂囊を積んで銃が上を向いている対空銃座がある。近くのかまぼこ兵舎から三、四人がとび出してきていて、飛行機を見上げていた。副操縦士が何か口にした。操縦士には聞かえない。副操縦士はポケットから封筒をつかみだし、不器用な大文字で走り書きした。「マーシー」

マーシーか……操縦士は地図を思い出そうとしていた。マーシーの向うには平地があった。これはチャンスが与えられたということだが、たとえその事実にとびついたとしても、機がとてもそこまでもたないことはわかっていた。

B17はよたよたと死に向っている。高度百フィート、それ以下かもしれない。彼は左エンジンのスロットルを締め、機首がちょっと上向くのを許した。生垣のある小道に分けられたふたつの畠がぐーっとせまってきた。いずれもB17を受け入れるだけの長さはなさそうだ。破れた腹が地面についたらすぐ、機は何百ヤードと大地をえぐり、バラバラになって燃えながら進むだろう。そこには横からはいりこまなければなるまい。手前の畠の境界の生垣をこえたとき、機は高度三十フィート足らずになっていた。彼は右エンジンのスロットル・スイッチを押しした。すぐにそれは全開の唸りを上げ、このだしぬけの力によるひと押しで、B17はキーッと左に曲った。その瞬間に操縦士は、機首を上げ、

巨大な爆撃機を畠に落した。ガクガクとすべってそれは生垣を破り、小道をこえ、となりの畠にはいる。畠のはずれの木立ちが機首に突きかかるようにせまってきた。強化ガラス板が地面を切り裂いて破れると、大きな泥のかたまりがはね上げられてくる。パリッと引き裂くような音とともに、機首と操縦室の全体がもぎとられて、二度でんぐり返り、止まってぐらぐらしていたがやがてまっすぐ静止した。B17の翼と胴体の残った部分は、横ざまに大地をえぐって木立ちのなかにつまこんでいった。数秒後にはにぶい爆破音。百ヤード離れたところでB17は淡いブルーの夕空に焰の巨大な柱と黒煙を上げながら爆発したのだった。燃える織維の破片が畠にころがってバラバラになった操縦室の残骸の上に降りかかった。座席にベルトで縛られた形のまま、操縦士は煙を上げている軍服のシャツの衿あたりの首筋を叩いた。彼は装具の非常脱出ボタンを押し、ふるえながら苦労して機首の大きく穴のあいている側からぬけだした。副操縦士は装具からはずれて、折れた翼材の向うにぐったりとぼろり出されている。こわれた機首の部分は火の危険はなかったが、燃えるB17から畠に押しよせてくる熱気は信じられないほど激しかった。弾丸の破裂する小止みないバチバチという音。操縦士は連れをつかまえると、半分しかえるようにして起し、さらに五十ヤード押すようにして遠ざかって行った。

副操縦士は意識を失っていたのだったが、いま目を開き、痛さに顔をしかめると、弱々しい笑顔を浮べた。その髪は血とオイルでべったり固まっていた。脚が異様な角度に体の下で妙な開き方をしていて、両方とも折れていて、右脚は完全に砕けていた。胸にもどうしようもないぱっくりあいた傷があった。若いその男は苦労しながら囁くような声で何かいっていた。操縦士がかがみこんで耳をその口に入れるくらいによせた。副操縦士の手がその手をつかみ、声に一瞬力が出た。

「ほかにはいないね……ほかには、こんなことをやってのけられた操縦士はこの世にいないね……」

煙を上げている生垣の向うのどこかから、遠い救急車の鐘の音が聞こえてきた。操縦士はベルトから、45口径コルト・オートマチックをぬき、すつと安全装置をはずし、銃口を若い男の首筋に当て、その後頭部を吹っ飛ばした。

## 2

操縦士のところに最初にかけてつけた人物はグレイ・ツイードの背広を着た中年男で、畠の先の生垣の一部を突き破って、息を大きくぜいぜいいわせながら操縦士が副操縦士の死体のわきにかがみこんでいるところにかけて上った。そのうしろからは、十七、八の、金髪をうしろで青いリボン

でまとめた娘がついて来る。副操縦士の碎けた頭を見るとすぐ、男はその娘に鋭く声をかけた。

「メアリー、そばによるんじゃない。いわれたとおりにしろ。この男はもうどうしようもない」

彼女は数ヤード手前で心もとなげに足を止めた。中年男は草地に尻を落して両手で頭をかかえていたが、指の間からその目は周囲を見張っていた。

「ほかに？」中年男の口調には一種の場なれした權威があった。操縦士は首をふった。

「みんなあのなかだ」彼はいつて、燃えているB17の骸骨のほうに頸をしゃくくった。その口調はきびきびとした、英米共通の口調だった。中年男は爆撃機のほうに向きなおった。その瞬間、操縦士はとび上って、その腕をつかんだ。「無駄だ」彼はいう。「見こみはまったくない。いざれにしても、連中はわたしの知る限りではここに不時着する前にみんな死んでいた」

男はうなずいた。彼は軍服の上着の衿についている金のバッジをちらっと見た。黄金の鷲の翼、それに両肩には二本棒。

「アメリカ軍だね、大尉、名前は……」

「ハドリー」操縦士はいった。「ラルフ・ハドリーです。合衆国空軍です」

「あんたは大丈夫かね？」男はいった。「怪我はどこに

も？」

「ええ」操縦士はいった。「吊るされるまでは死なないよりに生れついでるらしい」弱々しく彼は笑った。

「それでこの気の毒な男は？」中年男がいった。

「副操縦士です」操縦士はいう。「たしかに生きてはいたんですが、ちょうど消火器をもって後尾に行ったとき、機が落ちて、席についていなかったんです。機体が何回もでんぐり返ったんです。おかげでやつは脳味噌がとび出し、全然見こみはなかった」

「なるほど」相手はいった。「落ちるところはわたしも見ただ」

彼は手をさしだした。

「わたしの名はスコフィールド。ジョン・スコフィールド。その先に住んでいる」

彼は木立ちの向うの大きな家のグレイの屋根のほうにうなずいて見せた。

「実はわたしは、国防市民軍のこの部隊の大佐だ」彼はいった。「火が消えたらすぐに、機の残骸警備に何人か呼ぼう——それも消防が来たから、間もなくのはずだ」

二台の赤い消防車が白い救急車を従えて鼻をはずみながら走って来た。アスベストの消火服を着た消防士たちが、B17に泡を吹きつけはじめた。何十人もの人間がぞろぞろと生垣をぬけて、残骸からの熱気に目をかばいながら、う

ずくまった副操縦士の死体をこっそりとながめる。警察の車が一台、操縦士の脇に止まり、肩に銀の星が二個ずついている紺の制服の警官がおりました。

「やあ、警部」スコフィールドがいった。

「大佐、ずいぶん早くついたようですね」警官がいう。

「ヤーマスに車で行くところだった」スコフィールドはいった。「その小道ですごい音を耳にしてな——見のがしたことはあまりなかった」彼は操縦士のほうにうなずいて見せた。

「大丈夫ですか？」警部は操縦士にいった。

「それで……」警部はちょっとためらってからいう。「生き残ったのは……あんただけ？」

「そう」操縦士は簡単にいった。彼は副操縦士の死体が担架で救急車に積みこまれるのを見守った。

「どこか手当するところがありますか？」救急車のひとりがいった。

「いや、わたしは大丈夫だ」操縦士はいう。

「罨までいっしょに来られそうですか？」警部がいった。

「報告書を出さなければならぬので……名前や被害や何か……どういふものかご存知でしょう」

彼は警部に心細そうな笑顔を見せた。

「わかってもらえらると思うが、あなたに気をもませるつもりはないんですよ。ただ、こういうことにも軍のほうに規

則というのがある、それによって行動をはじめたほうがいいと思うんでね」

「いいかね、きみ」スコフィールドが警部にいった。「この人のことはいっそわたしにまかせたらどうだね？ わたしのうちから彼も報告の電話をかけられるし、メアリーがあなたかい飲み物と何か食べるものでも作ってやれる。わたしなら、彼の部隊が迎えの車を出してくれるところまで、送って行くこともできるし、その燃料もある。これは軍のことだし、わたしはこの国防市民軍の人間だ。その上であなたがあとでうちに来てくれれば、わたしから必要な詳しいことをすべて話そう。万事簡単にやろうや……」

操縦士は息をこらしていた。ちょっと間があって、警部がうなずいた。

「それならよさそうですな」

彼が手をさしだし、操縦士はその手を握った。

「では幸運を」警部はいった。「もし何かほかに協力が必要でしたら、喜んでお手伝いしますよ」

彼はいま死体を積んでガタガタともどる救急車のほうにうなずくと、その向うの煙を上げている火葬用の薪のようなB17を見た。

「こういうものはどうされるのかわかりませんな」彼はいった。「たぶん埋葬のためアメリカに送り返したいんですよ。しかし、もしこっちの教会墓地に置くのだったら、

ひとつだけ約束できます。われわれにとっては、今後も彼らはわれわれと同じ仲間です」

スコフィールド邸は操縦士がイギリスの雑誌で読んだもののような屋敷だった。ガラスをはめこんだ保守的な外構えて、きれいに刈り揃えた芝生にはクロケット用の環まで草のなかに立ててある。ふたつの大きな菜園があった——「昔は芝生だった」と砂利を敷いたドライブウェイに車を乗り入れながらスコフィールドはいった。「だが、もちろんいまではほかのだれもがやっとなるように、作れるだけの食糧は自分で作っている」彼は本棚が並んだ書齋に案内すると、車のなかで自分の娘だと紹介していたメアリーにコーヒーでもいれるようにといった。

「きつと、もつと強いものが欲しいかもしれないな？」彼は若い操縦士にいった。「わたしだったら、あんなめにあつてきた直後だから、たしかにそうだろうがね」

操縦士は首を横にふった。

「せっかくですが、結構です。電話だけお借りしたいんです。基地には何が起つたのか、できるだけ早く報告することになってますので」

「もちろんそうだったな」

スコフィールドはデスクの隅を指さした。

「電話はそこだ。わたしは退散していよう。そっちはほ

かのだれかに聞かれてはまずいことがあるのはわかっとなるからね。わたし自身もちろん空軍ではなかったが、軍服暮しをそのくらいやっとなるよ。軍隊といつても……この前のときのだ。だがな、少しも変わりはしないよ。変わらんものなんだ。ただ、理由も何も聞かずに、あなたの行きたいところへどこへでも車で送るとだけいっとなさい。それだけの燃料はないかもしれない、国防市民軍のが余分にちよつと手にはいっとなるがね」

彼は部屋から出て行き、操縦士は電話のところに歩みよつた。受話器をとり、まるで何か会話でもしているようにときどき口をきく。だが、彼は番号のダイヤルはまわしていかないのだった。しばらくして受話器を台にもどし、部屋の反対側に行つて鏡をのぞきこんだ。そうひどくはないぞと、彼は考えた。左頬に血の乾いたしみがあつたが、そのもとなつた切り傷は大したことはなかった。顔は破れた機首から突風のように吹きこんだ風を受けて赤くすりむけたようになつていたが、軍服は——羊毛の裏のついた飛行ジャケットをぬいだいま——かなりきちんとしていた。ポケットをさぐり金を出す——一ポンド紙幣十枚だった。ぬぎすてた飛行ヘルメットのかわりの軍帽まで彼は持っていた。飛行ジャケットの脇のポケットに押しこんであつたのだ——これは彼がいつも念のためにしていた用心だった。彼はその帽子を出してかぶつた。ちよつとくしゃくしゃに

なっていたが、頭にかぶってあたままるにつれて、しわは薄れるだろう。いずれにしても飛行機乗りはかなり奇妙な帽子をかぶっていることが多いのだと、彼は思い出した。

この間、あるB17の操縦士が何と云ってた？ なぜそいつの帽子がそんなに傷んでいるのか尋ねられたときだ。「二十回の出撃に出た帽子だからね」と操縦士は答えていた。「二十回もそいつの上に尻を落してるんだ——出撃のたびにだからさ」

いまではこの一時間に起ったことの反動が急速に彼のなかに現われてきていたし、肘掛椅子に腰をおろしてふるえる手を止めようとしていると、メアリーと呼ばれていた娘がドアをノックして「コーヒーとサンドイッチの盆を持ってきた。」

「先に手を洗って、これはあとにします？」娘は尋ねた。

「それとも、すぐにあがりますか？」

彼女は晶で彼が考えていたよりふけていた——たぶん十九だろう。だが、イギリス娘によくある、あの妙にうぶで未成熟なところがあった。そこに坐ったまま手がふるえているのに、彼はささやかな欲情のわななきを感じた。任務から帰着するとすぐに女のところにかつつけたことがどのくらいあるか、彼は皮肉に思った。一度彼に「あんたにとってセックスは拇指をしゃぶる癖みたいなものなんですよ？」といった女がいた。「自分を慰めるための癖なのよ

ね？ あんたって、大人になつてないのよ。それに、いつまでたっても大人にはなれないでしょうね」いずれにしても彼は、その女がどうしてもらうのが好きかは見つけ出していた。彼女は急いで首根っ子をへし折るくらいすっぱすのが好きなのだった。彼にはベッドのなかでも大空でもそういうやり方には何の造作もないのだった。ペーテルとは似ても似つかない。女たちはペーテルのことを愛していた……「おれはまず女たちをおだてていいよ」彼はよくいっていた。「そのほうがずっとうまくいくんだ……」とにかく、そのペーテルも二度と女にいいよることはできないだろう。一瞬、撃ち碎かれたその金髪の頭がいまどこの冷たいイギリスの死体収容所に救急車で送られているところが、彼の心の目にあふれるように映った。彼は身ぶるいした。

「寒いんですか？」娘がいった。「たぶんショックのせいね。さあ——コーヒーをおあがりなさい。お医者に見せたほうがいいと思うけど、どうかしら」

操縦士は首をふって、無理に笑顔になった。

「いや、わたしは大丈夫ですよ、お嬢さん。ただ、コーヒーはいただきたいな。それから手を洗って、軍服をきれいにしたい」

彼女はコーヒーを注ぎ、彼の顔を見るとその手を止めて軽い笑い声を立てた。